

七つの言葉

LAS SIETE PALABRAS

初学者のための神秘学入門

サマエル・アウン・ベオール

コスミックドラマ

イニシエイトがアストラル体のクンダリーニを心臓まで至らせたとき、主イエス・キリストの象徴的な死と復活を体験する。

そのときイニシエイトは、内的世界においてアストラル体でゴルゴタの全ドラマを生きることになる。

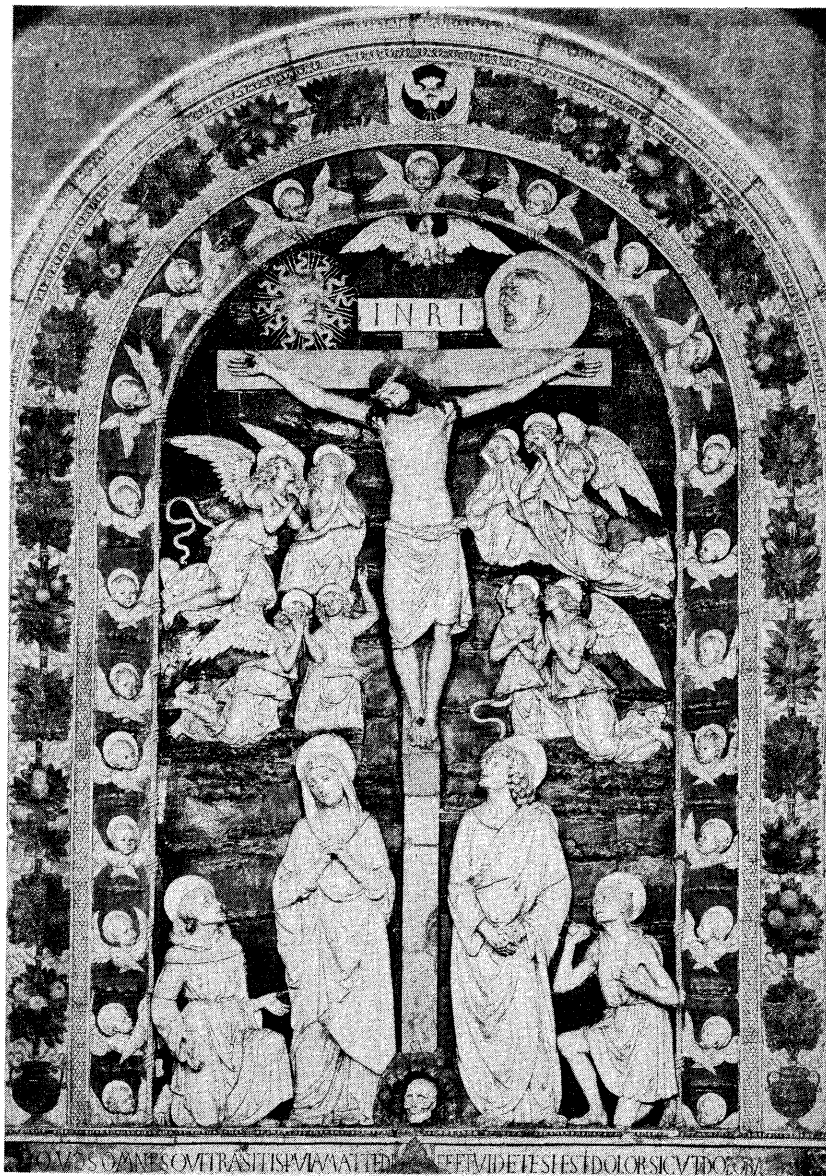
ユダはイニシエイトを裏切り、ユダの子はイニシエイトの心臓に槍を突き刺す。その槍でロンギヌスは主のわき腹を傷つけたのである。そのときカルバリオ（ゴルゴタの丘）のおそろべき七つの言葉がイニシエイトに引き渡され、それはマスターに七つの偉大な宇宙世界を支配する力を与える。この七つの言葉は、叡智の寺院にある七本の柱に火で刻印されている。その寺院はおそろしく神聖である。

アストラル界でカルバリオの、この全ドラマを生きななければならない。そのとき、第三段階の火の力が完成したことになる。

七つの言葉は七段階の火の力に、そして叡智の龍が持つ七つの火焰の舌に対応する。第三段階の火の力が心臓に到達するとき、心臓は驚くほど美しい太陽のように輝き、きらめく。

第三段階の火の力は完璧にアストラル体をクリスト化し、アストラル体のチャクラを全開にする。

普通の人の場合、チャクラは単に有機体の霊的・生物学的機能と密接に関係する動物的な霊的感覚に過ぎない。タットワは内分泌腺に入り、ホルモンとなる。アストラル体のチャクラは、まさしくタットワの入る扉である。しかし、第三段階の火の力がアストラル体をクリスト化するとき、チャクラは黙示録の語る“教会”に変わる。



キリストの磔刑（アンドレア・ディラ・ロッチャ作）

『ベルの革命』というノーシスの著作の中には、「七つの教会は靈魂、すなわち意識体の中にある」と書かれている。確かにそのとおりである。しかし第三段階の火の力がアストラル体のチャクラを開くとき、チャクラは七つの教会になる。それ以前では、単なる動物的な靈的感覚に過ぎない。

クリスト化のワークをせずに、チャクラの開発にのみ専念する者は黒魔術師になる。

火の神アグニは大密議の七大イニシエーションの一つひとつを通して、各々の体の火の力を回復させる。超視覚でアグニ神を見ると、生まれたばかりの赤ん坊に見えるが、アグニ神は宇宙のおそろべき王者である。

アストラル体におけるゴルゴタの出来事を経て、この体は力と栄光に満ちた、生けるナザレ人になる。このような理由で、ノーシスの儀式において次のように言うのである。「私は子であるコスミック・クレストスを信じる。それは我々の肉体的人格を、父である至高の内在に結び合わせるアストラルの力強い架け橋」。（『ノーシス典礼書』）

大密儀の第三イニシエーションにおいて、アストラル体はガリラヤの聖なるラビ（師）の象徴的な死と復活を経験する。そして十字架上に「人の子」である我々のクレストスを超視覚で見る。次に復活の前にガラスの聖墓の中に「人の子」が入っていくのを見る。その後、イニシエイトは星の力によって試練に掛けられ、黒魔術師たちは怒り狂って絶え間なく攻撃する。そこで七つの言葉は、イニシエイトを全能で不死身の存在にする。

アストラル体の神秘の名は、「ザフナテ・パネア」という。

この名は二語で構成されている。最初のザフナテは、下位のアストラル体に対応するマントラである。次の言葉のパネアは、子であるコスミック・クレストスのことである。それは肉体的人格を父である太陽の至高の内在に結び合わせるのである。

エジプシャン・マントラ

我々の弟子たちは幽体離脱の能力を獲得すべきである。聖なるマントラ「EGIPTO（エヒプト）」を毎日一時間発音すれば、その能力を獲得することができる。母音「E（エ）」は甲状腺を振動させ、神秘的聴力を授けてくれる。「G（ヒ）」は肝臓のチャクラを目覚めさせるが、このチャクラが十分発達すると、望むままに肉体を出入りすることができる。文字Pと結合した母音「I（イ）」によって超視覚と、松果腺であるブラフマの窓を通してアストラル体で肉体を離脱する能力を開発できる。文字Tは、心臓のチャクラと密接に関係する母音「O（オ）」に叩きつけるように発音する。このチャクラが目覚めると肉体の包みから自由になり、幽体離脱する能力を獲得できる。このマントラの正しい発音はこうである。

エー ヒー プー トー
E E E E E G G G I I I I I P P P T T T O O O O O

ノーシスの鍵を使ってまだ幽体離脱のできない人は、その能力を持っていないからである。その場合は毎日一時間、マントラ「EGIPTO」を発音して、まずその能力を手に入れたとよい。このマントラはアストラル体の離脱に関係するチャクラを完全に開いてくれる。それによって、肉体を意のままに出入りする能力を獲得することができる。

幽体離脱に使われるエジプシャン・マントラは、「FARAON（ファラオン）」である。このマントラはエジプトのピラミッドにマインドを集中しながら、覚醒から眠りへの移行状態のときに発音する。このマントラの正しい発音はこうである。

ファー ルラー オー ン
F A A A A A R R R R R A A A A A O O O O O N N N N N

このマントラは幽体離脱のためのものであり、すでに言ったように、エジプトのピラミッドにマインドを集中して、覚醒から眠りへの移行状態のときに唱えるのである。しかし幽体離脱の能力を持っていない弟子は、繰り返し言うが、マントラ「EGIPTO」を毎日一時間発音して、まずそ

の能力を獲得すべきである。

大密儀の第三イニシエーションと共に、クレストスの死、埋葬、復活が我々の内で完了する。

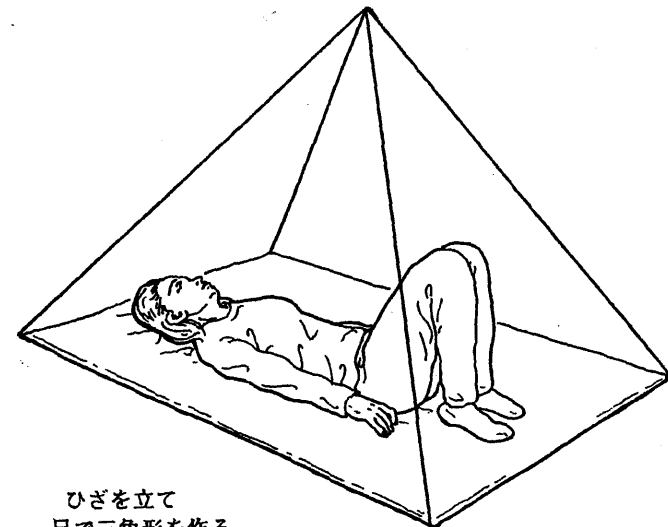
三日目に我々の架け橋、アストラル体、コスミック・クレストスが、クリスタルの墓（聖墓）から身を起こす。それから意識の高次元の世界で、復活を祝福して荘厳な祝典が執り行われる。

内なるマスターはいかなる種類の有形の乗り物も持たずに、荘厳な祝典に列席する。「傲慢は勝利とともに死ぬ」。

「死よ、おまえのとげはどこにあるのか。

よみ
黄泉よ、おまえの勝利はどこにあるのか」。

（『コリント人への第一の手紙』15:55、『ホセア書』13:14）



ひざを立て
足で三角形を作る

マントラ「EPHRAIM (エフライム)」には、すべてのチャクラと
コスミック・クレストスの力を発達させるパワーがある。このマントラは
次のように発音する。

エー　　フ　ハ　　ルラ　　イー　　ム
EEEEPPPHHHRRRRRAAAAIIIMMMM

アストラル体のすべての神秘的な能力は、この力強いエジプシャン・マン
トラによって活性化される。

母音「H (ハ)」は深いため息のように発音する。文字Pはこの母音「ハ」
に力を与えるもので、唇をぎゅっと結んで空気を吹いているときのように
する。あるカトリックの司祭がアステカの魔術師に質問した。「あなたは
神をどう呼ぶのですか」。すると魔術師は深いため息をしてそれに答えた。
そのため息は母音「ハ」であった。この「ハ」がその息の言葉の中に見出
される。たとえ文法学者たちがそうは言わなくても、「ハ」は母音である。
「ハ」は生命の氣息、火の息であり、「PH (プハ)」のように文字Pと
組み合わせると、唇で生命の氣息を反響させるような感覚をもたらす。こ
のような理由で、このマントラの中にはおそれるべき力が隠されている。

母音「E (エ)」は甲状腺チャクラとマインドの力を開発する。また「P
H (プハ)」は火の息をアストラル体のすべてのチャクラにもたらし目覚め
させる。さらにマントラ「RA (ラ)」はアストラル体のすべてのチャクラ
を振動させる。

母音「I (イ)」は頭部のチャクラを目覚めさせ、「IM (イム)」の
ように母音「M (ム)」と組み合わせると、母音「イ」はおそれるべき力
を得る。その力がアストラル体のすべてのチャクラを通して拡散し、チャ
クラに生命を与え、火をともしである。

母音「M (ム)」は口で感じる音として発音するが、唇は閉じているの
で音は鼻から出るはずである。この母音は驚嘆すべき力を秘めている。

ベニヤミンの銀杯

クレストス復活の一切の秘密は、ベニヤミンの銀の杯にある。

ナザレ派は聖なるシンボルとしてカリス（聖杯）を使っていた。

「彼らはベニヤミンの精液をそれで飲んでいて、その精液はワインと水
からできている、と彼らは言っていた」。

ベニヤミンは、アストラルの乗り物のまさにその実質を表すシンボルで
ある。それはまさしく我々のクレストスであり、主イエス・キリストの象
徴的な死を通過しなければならない。ベニヤミンの大袋の中で発見された
銀の杯は、精液のエネルギーに満ちた光のワイン、または贖いの血で満ち
た聖杯、神聖なカリスである。ベニヤミンのカリスで飲むことによって、
我々はクレストスの復活を達成する。

クレストス、つまりアストラルの架け橋の復活を注意深く調査すれば、
超視覚を通して、本質的な基礎、独立した靈魂の原理、高位のアストラル
を見ることができる。それはヤコブの子、ヨセフの愛する弟ベニヤミンに
よって表される。

その神聖なアストラルは三日間クリスタルの墓、すなわち聖墓の中にと
どまり、そして三日目にインティモと結合し、融合して、墓から起き上
がる。そのことすべてが、大密儀の第三イニシエーションの奥義参入の過程
である。

ヤコブの子ヨセフの伝説の中には、クレストスの奥義参入の過程が記さ
れている。ヨセフは、人間のアストラル体を象徴している。大袋の中の銀
杯のように、ベニヤミンはアストラル体内に含まれるその高位のアストラ
ルを、その神聖なクレストスを象徴している。その大袋とはまさしく前述
したアストラル体のことであり、ベニヤミンの神聖なアストラルはクレス
トスであり、ベニヤミン自身であり、高位のアストラルのことである。父
のもとに我々が帰るのは、その神聖で高位のアストラルを介してである。

ヨセフはベニヤミンを介して、父ヤコブに再会した。

小麦の穂を観察すれば、強い太陽光線のもとで1ミリ1ミリ生長して、ついに穀粒の実る様子がわかる。ひとたび穀粒が実ると他のものは死ぬ。

ベニヤミンの大袋の中に、すなわちアストラル体の中に性エネルギーのカリスがある。その力によって、一種の独立した高位のアストラルが形成され、三日後の復活で「インティモ」と結合し、そして融合する。

その新しいアストラルはまさしくクレストスとなり、ベニヤミンの大袋を捨てる。そして、蝶がさなぎから抜け出ると同じように、それが生じた源であるアストラルの「袋」から抜け出るのである。そして新しいアストラルが叫ぶ。「書かれているとおり、私はあなたの腰の中に住むであろう」と。

生は死を糧とし、死は生のために働く。生命が生じるために我々の古い情欲は死ぬ。この新しいアストラルは、言葉では表現できない中心柱(Plerome)であり、完全に熟したネクターであり、至高の智慧である。

新時代のためのメッセージ

神智学徒、バラ十字会員、心霊主義者たちはアストラル体について多くを語り、それをすっかり熟知していると思っている。

しかし彼らの中でこれまで一度でも、三番目の火の蛇について、また高位のアストラルの超生物学と超生理学について語った者があるだろうか。またアストラル体内に別の高位のアストラル体が形成されるということを誰が知っていたのだろうか。どのようにして三番目の蛇がベニヤミンすなわち高位のアストラルのきわめて細い脊髄経路を上昇するのかを、彼らは知っているというのだろうか。

神智学、バラ十字会の神秘思想、心霊主義などについて書いてある世界

中の全書物は水瓶座の新しい時代にはもはや完全に時代遅れである、と私はあえて断言する。それゆえに、改訂して核心の部分のみを抜き出すべきである。

私サマエル・アウン・ベオールは、人類に対して白ロジが水瓶座の新しい時代のために送る真正のメッセージをここに引き渡そう。

神は人間に蛇の智慧を手渡された。これ以上何が欲しいというのか。この知識は私のものではなく、神のものである。私個人は何の価値もない。著作がすべてであり、私は使者に過ぎないのである。

二種類の誕生

すべての人が高位のアストラルを持っているわけではない。それは妻と熱心に性の秘儀を行うことによって、つくり上げなければならない。これがいわゆる「我々の内にキリストを形成する」ということである。

そこで我々ノスティックは二種類の誕生について述べておきたい。「性交による肉の誕生（射精を伴う）と性交が不必要なもう一つの誕生（射精を伴わない）」である。第一の誕生、すなわち姦淫者の性交から死が定められた人間が生まれ、第二の誕生、すなわち性の秘儀または聖霊の受胎から天使が生まれる。クレストスが、新しいアストラル体が、架け橋のキリストが、生まれるのである。

このように、智慧と愛をもって生きる家庭のかまど（炉）の道は、ニルヴァーナの言語に絶する歓喜へと我々を導く。女性は道である。女性は扉である。

ルター聖書

クレストスの復活後、イニシエイトは隠れた敵の地下世界に降りて行かなければならない。

復活後、キリストは地獄に降りて行き、そこから人類の始祖、すなわちアブラハム、ヤコブたちの霊を救い出さねばならなかった、と言われる。これは、イニシエイトが復活後生きなければならない出来事の生きたシンボルである。

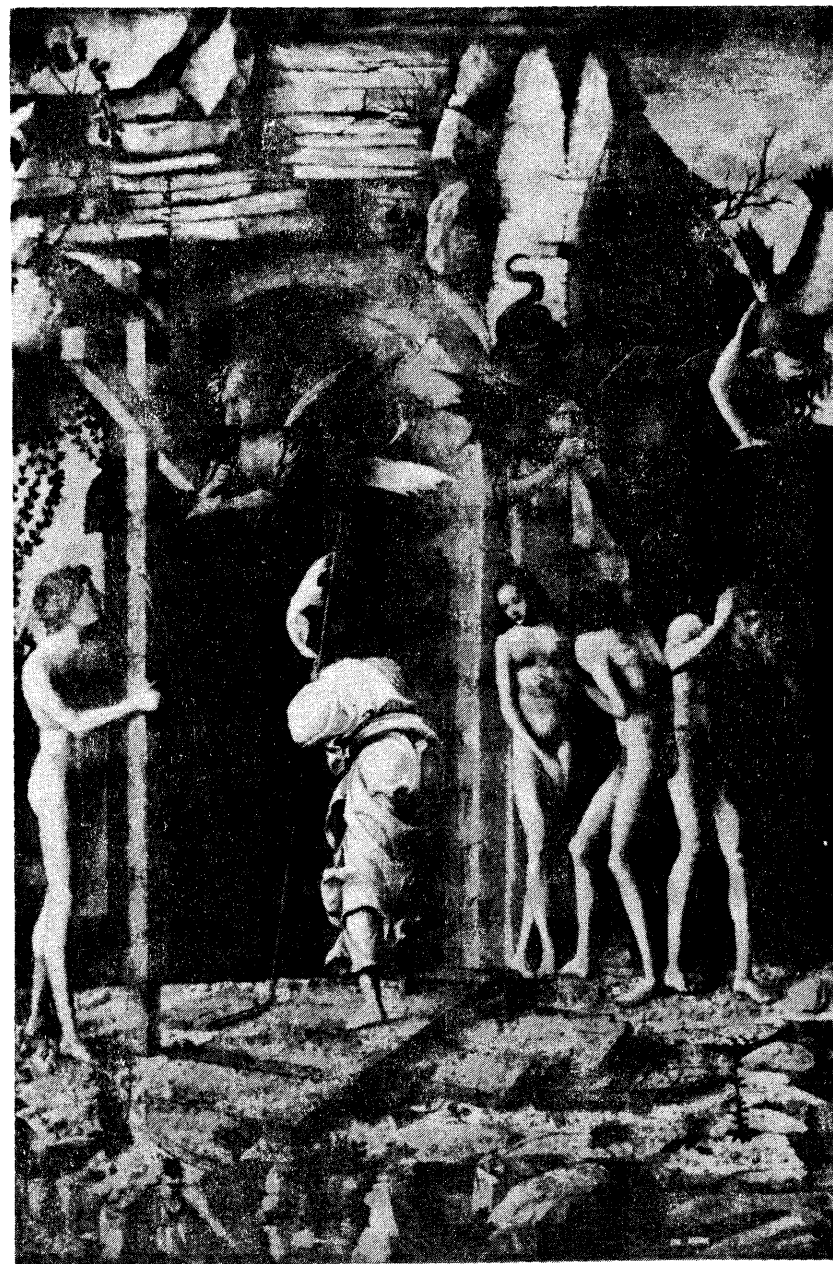
残念にもルター聖書はこれらの有意義な章句を原書のテキストから削除してしまったが、疑いの余地なくこれはプロテスタント諸派のまさにその無知によるものである。たとえプロテスタント信者たちがルターは正真正銘の原語のギリシア語から翻訳したと断言しても、それは間違っている。なぜならマルチン・ルターはギリシア語を知らなかったからである。

聖書のギリシア語原本のテキストは、今日では我々ノスティックのみがノーシス神聖教会内に所有しているだけである。聖書はノスティックの神聖な書物であり、ノスティックのみがそれを理解できる。

ルター聖書は聖ヒエロニムスの翻訳作品に基づいているが、そこには意図的な欠陥がある。なぜなら聖ヒエロニムスは、教皇 Damas Ⅰ から受けた命令により、ローマ・カトリックの教義に従って内容を書き変えなければならなかったからである。聖ヒエロニムスはラテン語訳聖書の本当の著者であった。

奈落への下降と昇天

昇天前に、キリストは弟子たちの前に数回出現した。聖女の一人、マグダラのマリアの前に姿を現したとき、こう言われた。「わたしに触ってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上がっていないのだから。ただ、



冥府下りー地獄に降りていくイエス・キリスト

わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上がって行く』と、彼らに伝えなさい。(『ヨハネ福音書』20:17)

昇天前にイニシエイトは地獄に降りていき、そこで最も奥深い悪の根源を絶たなければならない。実際に地獄界へ侵入していくのであるが、それは言葉で表現できるものではない。

それから、「クレストス」復活後のちょうど四十日目に昇天が到来する。

しかしアストラルの干渉なしには、物質界に意識の高次元世界の記憶をもたらすのはきわめて困難であろう。アストラルは架け橋であり、すでに言ったように内分泌腺および交感神経系と密接に関係している。

アストラル体のすべての感覚は内分泌腺と深く関係している。そのためにアストラル体の根を地下世界から引き抜き、神界層に根づかせることが緊急に必要である。なぜならアストラル体は、世俗的パーソナリティを天上の人間に結びつけるために、我々の所有する道具だからである。

次のような仕方でのみ、昇天後に起きる聖霊イルミネーションの正覚を説明できる。聖書の節を見てみよう。

「ただ、聖霊があなたがたに下るとき、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」。

「こう言い終わると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」。(『使徒行伝』1:8,9)

大密儀の第二イニシエーションでは水で洗礼され、大密儀の第三イニシエーションでは聖霊の火で洗礼される。ヨハネは水で洗礼を施したが、キリストは火で洗礼を施す。

「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを受けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを受けられるであろう」。(『使徒行伝』1:5)

イニシエイトは、昇天前の四十日間は性的な接触は完全に禁じられる。なぜなら、いかなる情欲の波もない、完全に光輝いた平静な状態にオーラを保っておかなければならないからである。

四十日後ようやく性の秘儀を続行できる。けれども昇天前の四十日間はマインドによって性エネルギーを昇華しなければならない。アストラル体の昇天に先立つ四十日間というのは、悪の創造物との一切のつながり、一切の付け根、一切のきずなを完全に断ち切るために奈落に降りていくべきときであり、それを避けることはできない。

奈落で昔の悪の同僚と遭遇するが、そのとき彼らは我々をあざけり、絶え間なく攻撃してくる。そこで過去の闇のすべての場面を生きなければならない。再び生きなければならない、と言ったほうがいいだろう。こうして我々の生命の木と悪の奈落とを結ぶ根を断つのである。この四十日間マスターが妻との性の秘儀を慎まねばならない理由を、ここでイニシエイトは初めて理解できるだろう。悪の力からオーラを守るために、そしてヒエラルキーが、さらにアストラルの乗り物の根を悪の腐敗から引き抜くための重労働を容易にするために、オーラは燦然と光輝いている必要がある。これはヒエラルキーにとって大変厳しい作業である。

今や道の帰依者は、四旬節の秘教的意味を理解できるだろう。正真正銘の四旬節はマスターの磔刑の前にあるのではなく、その後にある。しかしカトリック教会や他の新カトリック派、プロテスタント、アドヴェンティスト（再臨派）などは、すでに四旬節の伝統をことごとく失っている。

いかに人類が悪の奈落に深く根を下ろしているか、それを見ると嘆かずにおられない。闇とのきずなを根こそぎ断ち切るために、奈落でもう一度再体験しなければならない。過去の痛ましい場面がこの地下世界にいるイニシエイトの眼前に展開するが、それはイニシエイトが闇に告げる別れである。

この聖四旬節の間、イニシエイトは悪魔でないとはいえ、悪魔どもに囲まれる。このためマグダラのマリヤが「ラボニ（先生）、ラボニ」と叫ん

でマスターに触わろうとしたとき、キリストは言われた。「わたしに触ってはいけない。わたしはまだ父のみもとに上がっていないのだから。……」
（『ヨハネ福音書』20:17）

そのときキリストは「わたしに触ってはいけない」と言ったが、それはマスターのアストラル体が悪魔どもに囲まれていたからである。

マグダラのマリヤはガリラヤの聖なるラビ（師、先生）を深く愛していた。ゴルゴタの磔刑のときに、立って壁にもたれていたマリヤはキリストに有罪を宣告していた恐ろしい言葉「ティボ(Tibo)、ティボ、ティボ」を聞くと、言いようのない恐怖でいっぱいになった。

キリストの使命は実におそろべきものである。主は非常に重い十字架をその両肩ですべて背負った。我々を救うのはクリスティックな力である。子羊の血は悪の奈落から我々を救うものである。死者復活の教義はキリストの教義である。

この四句節の間、イニシエイトは生命の舟を「アエオドン(AEODON)」(苦悩)の港につなぐその綱を永久に断ち切る。

本書の中で、アストラル体または架け橋のクレストスの復活と昇天について語ってきたが、これはナザレ人の教義である。『ベルの革命』の中で神聖な意識の復活（高いイニシエーション）について語っているが、自分の「栄光」と融合するとき「無余涅槃」によって起こる超越的昇天についても語っている。しかし本章では、アストラル体または架け橋のクレストスの死、復活、そして昇天のみに限ることにしよう。

ヨセフの物語

アストラル体のこの奥義参入の過程は、ヤコブの子ヨセフの象徴的な物語の中にことごとく隠されている。

ヨセフは人間のアストラル体を象徴し、ヤコブは天にまします父を、星である父を象徴している。ヨセフは自分自身の兄弟たちに売られる。我々がニルヴァーナへ至る石ころだらけの道に足を踏み入れる決心をするとき、旧友はみな我々を裏切り、売り払う。ヨセフは宦官^{かんがん}の召使になる。そしてキリストは言った。「天国のために、みずから進んで独身者となった者もある」。（『マタイ福音書』19:12）

ヨセフが純潔の道に従う決心をすると、一人の女性によって誘惑された。そして悲しみの牢獄に入れられ、中傷され、名誉を傷つけられるが、彼は純潔の誓いを固く守る。

苦しみの獄中、実質成分変換のパンとワイン以外の慰めはない。キリストは酌人（給仕長）であり、パン職人（料理長）である。そこではキリストは我々のために苦しむ酌人とパン職人、つまり我々を贖ってくれるクリスティックな実質である。それは我々を救い、悲しみと苦しみの牢獄から解放し、そしてついに内なるファラオ、聖なるインティモ、王の足下まで導く。彼は我々をエジプト全土の頭^{かしら}および司^{つかさ}とするのである。

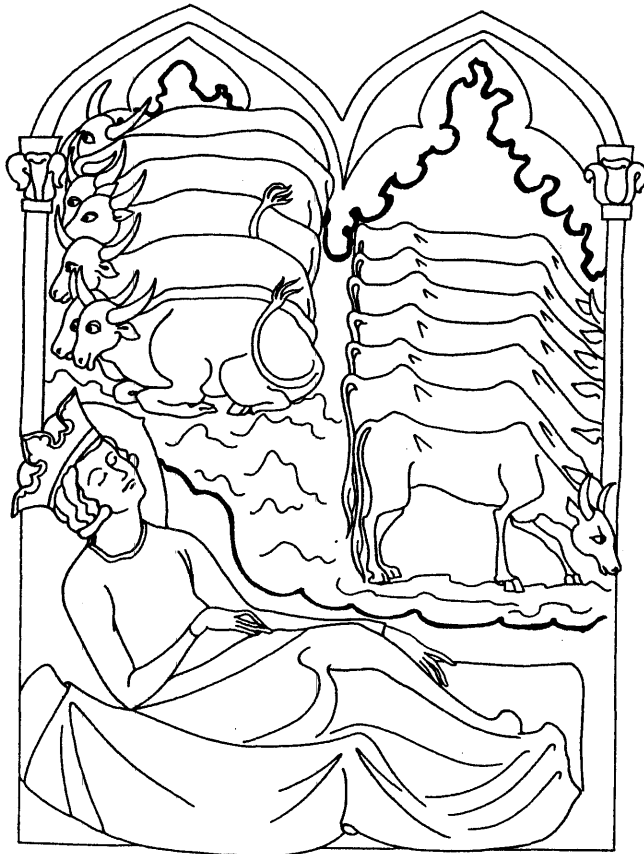
このようにして我々は高いイニシエーションに到達し、架け橋であるクレストスの復活のための準備をするのである。ヤコブの十二人の息子、すなわち黄道帯（黄道十二宮）は我々を取り巻き、そして巡っていく。そうしてついに我々のベニヤミンに出会うのである。ベニヤミンを通して我々は復活し、星の父をもう一度抱きしめる。

各人の「インティモ」は、一柱の星の神の意識から放たれた一つの炎である。その星の神は天にまします我らの父、「インティモ」の父、我々のヤコブである。過去の数冊の著作において、このことはすでに説明した。

ファラオの夢もきわめて象徴的である。七年の豊作と七年の飢饉は、七段階の火の力、すなわち大密儀の七つのイニシエーションおよび大密儀の七大イニシエーションの各々の苦しみを、すなわち七つの門の各々の悲しみを象徴している。

ベニヤミンの銀の杯は、アストラル体が死者の間から復活するための手段となる精液である。

ヨセフの妻アセナテはアルハットのマインド・クリストであり、ホメロスが『イリアス』の中で詩った美しき^{うた}ヘレネである。彼女はオン（下エジプトの首都）の祭司、すなわち「インティモ」、我々の真実の本質的存在の娘である。



肥えた七頭の牝牛と痩せ細った七頭の牝牛は、大密儀の七つのイニシエーションとそのイニシエーションの試練を象徴する。
(13世紀の聖ルイスの詩編集の挿絵を模写)

ヨセフの息子はマナセとエフライムである。マナセは暗黒のマントラであり、その中には父の家から我々を引き離してエデンの園から追い出したすべての悪の力が含まれている。エフライムは、苦悩の地で我々を豊かにする力強いマントラである。なぜならアストラル体のすべての力を目覚めさせ、そしてエデンの園へ戻ることを可能にする神聖なすべての力を含んでいるからである。

ヤコブのきらめく星がその頭上に輝くために、我々のヨセフ、すなわちアストラル体は腐敗と墮落の牢獄から完全に解放されなければならない。

アストラル体が奈落から解き放されると父の星に戻る。父の星はいつも微笑んでいる。イニシエイトのアストラル体は、父の星のオーラに入る。

「ベニヤミンはかき裂くおおかみ、
朝にその獲物を食らい、
夕にその分捕物^{ぶんとりもの}を分けるであろう」。(『創世記』49:27)

我々のベニヤミンは悪の奈落から我々を引き離し、朝にその光の獲物を食らい、夕にその分捕物を分ける。そのとき悪の奈落からアストラル体の根を引き抜く。

「ヨセフは実を結ぶ若木（アストラル体）、
泉のほとりの実を結ぶ若木。
その枝は、かきねを越えるであろう。

射る者は彼を激しく攻め、
彼を射、彼をいたく悩ました。

しかし彼の弓はなお強く
彼の腕は素早い。
これはヤコブの全能者の手により、
イスラエルの岩なる牧者の名により、
あなたを助ける父の神（「インティモ」の父なる星）により、

また上なる天の祝福、
下に横たわる淵の祝福、
乳房と胎の祝福をもって、
あなたを恵まれる全能者による。

あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、
永久の丘の賜物にまさる。
これらの祝福はヨセフのかしらに帰し、
その兄弟たちの君たる者（我々のベニヤミン、彼は我々を神のもとに、
そして父のもとに連れ去る）の頭の頂きに帰する」。
（『創世記』 49:22～26）

イニシエーションは人生そのもの

エジプトの族長ヨセフは存在しなかった、と断言するつもりはない。私が明言したいのは、一人ひとりのイニシエイトの人生にイニシエーションのドラマが含まれている、ということである。ヨセフの物語には、彼のドラマが表れている。

また賢明なパロ（エジプトの王）が見た夢をヨセフが解釈したが、そのとおりに実現したエジプトにおける七年の豊作と七年の飢饉を否定するつもりもない。疑問の余地なくこれは起こったことであるが、この中にはイニシエイトのイニシエーションのドラマがすべて含まれている。

ヤコブの十二人の息子は全く黄道十二宮であり、その中で我々はずっと進化し、そして退化してきた。

ゆえに昔のあらゆる神話、伝説の中には、宇宙の大いなる真理が隠されている。イニシエイトの人生は象徴的な人物、形とことごとく関係していて、イニシエイトの間でのみ正しく理解しあうことができる。

イニシエーションは人生そのものであり、それゆえ一人のイニシエイト

の人生はまさにイニシエーションのドラマなのである。

楽園追放とヨセフの物語

以下の節を見てみよう。

「さてヨセフは連れられてエジプトに下ったが、パロの役人で侍衛長であったエジプトびとポテパルは、彼をそこに連れ下ったイシマエルびとらの手から買い取った」。

「これらの事の後、主人の妻はヨセフに目をつけて言った。『わたしと寝なさい』」。

「ヨセフは拒んで、主人の妻に言った。『御主人はわたしがいるので家の中の何をも顧みず、その持ち物をみなわたしの手にゆだねられました』」。
（『創世記』 39:1、7～8）

これらの節から、全く寓意的な物語を述べていることがわかる。なぜなら去勢された宦官が妻を持つなど全くとんでもないことだからである。それゆえに聖書を理解するにはノスティックになる必要がある。聖書は高度に象徴的な書物だからである。聖書をプロテスタント式に、つまり新聞のコラムを読むように読もうとすれば、愚の骨頂に陥ることになる。

ヨセフの物語全体は聖櫃であり、その中にはカルバリオの、まさにそのドラマが納められている。

族長ヨセフの象徴的な物語を理解するには、イニシエイトになる必要がある。

創世記の第三章には、どのようにして人間がエデンの園から出ていったのかが示されているが、同じ創世記にヨセフの物語を取り上げている章がある。それにはどのようにして人間が父の家を去ったか、そしていかにして父の腕の中に、エデンの園の言いようのない至福に、人間が一度出た楽園に戻るのかについて説明されている。

人の子の復活はベニヤミンの銀の杯で飲むことによつてのみ、すなわち妻と熱心に性の秘儀を行うことによつてのみ可能である。ベニヤミンは我々を神のもとに、そして父のもとに連れ去る。

ヨセフの物語の中にはエデンの園に戻るための秘密が隠されている。だからこそ、この物語は同じ創世記の中にあるのである。

女性はヨセフを誘惑するが、ヨセフはその誘惑に打ち勝つ。この中には「性の秘儀」の鍵が隠されている。耳のある者は聞きなさい。知性ある者は理解しなさい。ここに智慧があるのだから。

(マタイ 13:9、マルコ 4:9、23、ルカ 14:35)

奈落での作業

マスターの昇天に先立つこの聖四旬節の間、偉大な覚者たちの言い表すことのできない言葉が、閉ざされた寺院の中に神秘的な反響とともに響きわたる。それは聖なるイニシエイト団にとって、奮闘の四十日である。

閉ざされた寺院の中、神聖言語で神秘的な歌を歌いながら、マスターたちは聖なる言葉の力によって、奈落の悪に深く食い込んだ根から我々のアストラルの乗り物を切り離す。その奈落の中に、昔からアストラル体は根を張っているのである。そのとき、闇に最後の別れを告げるために過去の闇の場面をすべて生きなければならない。より正確に言えば、再び生きなければならないということである。

新しく現れ出る前に過去の出来事を反復するのは自然の法則である。胎児は誕生前に母胎内で人類進化の過去の全過程を反復する。化学的な地球は虹の時代を開始する前に月期、太陽期、土星期を反復した。

それゆえに復活後、イニシエイトは昇天前に奈落ですべての過去を再現しなければならない。イニシエイトはまさしく地獄の領域で自分の過去の最も暗黒の場面を再現することから始める。それから、より恐ろしさの少ない領域へ、より残忍さのましな場面へと、少しずつ上昇していく。

死者復活の教義

奈落で過去生のすべての恐ろしい悪を再度生きるが、そのとき我々にとってのキリストの意義を悟る。世界の聖なる救世主の助けなしでは、奈落から這い上がることは全く不可能であつただろう。死者復活の教義はキリストの教義である。死者とは全人類のことである。ゴルゴタの殉教者の血によつてのみ、全人類は復活できるであろう。

人間的霊が生ける死者たちの間から復活するとき、天使となる。そのとき微細な世界のすべての驚異とすべての力がその霊に開示される。一切のヴェールがはぎ取られ、彼は宇宙の柱の神となる。

これはキリストが密かに七十人の弟子たちに教えた教義である。

「さて、キリストは死者の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか」。

「もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかつたであろう」。

「もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」。

「すると、わたしたちは神にそむく偽証人にさえなるわけだ。なぜなら万一死人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかつたはずのキリストを、よみがえらせたと言って、神に反するあかしを立てたことになるからである」。

「もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかつたであろう」。

「もしキリストがよみがえらなかつたとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、今なお罪の中にいることになるだろう」。

「そうだとすると、キリストにあつて眠った者たちは、滅んでしまったのである」。

「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあつて単なる望みをい



復活したイエス・キリスト

だいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる」。

「しかし事実、キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである」。

「それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこななければならない」。

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」。

(『コリント人への第一の手紙』15:12~22)

このようにキリストの教義は死者復活の教義である。

生ける死者

我々ノスティックは全人類を「死者」、すなわち生ける死者と見なす。全人類を生ける死者と呼ぶのは以下の理由による。

1. 内的世界の出来事を何も見聞きできない。
2. 病と死に拘束されている。
3. 宇宙の諸力を操作する術を知らない。
4. 悲しみと苦しみに束縛されている。
5. 生と死の神秘を支配する力を持っていないし、その神秘も知らない。
6. 自分の意に反して死に、自分の意に反して生きる。またどのように生まれるかも、どのように死ぬかも知らない。
7. 奈落の住人である。

霊の復活

さて我々ノスティックは、イニシエーションによってのみ死者たちの復活は可能である、と教える。死者たちの復活とは霊の復活のことであり、肉体のそれではない。

「兄弟たちよ、わたしはこの事を言うておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない」。

(『コリント人への第一の手紙』15:50)

「死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである」。

「聖書に『最初の人アダムは生きたものとなった』と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった」。

「最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである」。

「第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る」。

(『コリント人への第一の手紙』15:42～47)

これらの節から、復活とは霊の復活のことであり、肉体のそれではないということが完全に証明される。

プロテスタント、カトリック、アドヴェンティスト、プレスビテリアンズ(長老派教会員)が考えるように、大いなる最後の審判のラッパの音で骨と骨とがくっついて復活するであろう、などと考えるのは愚の骨頂である。そのようなでたらめを受け入れるのは、余程おめでたい人に違いない。

死者復活は神秘的な叡智によってのみ達成される。

「むしろ、わたしたちが語るのは、隠された奥義としての神の知恵である。それは神が、わたしたちの受ける栄光のために、世の始まらぬ先から、あらかじめ定めておかれたものである」。(『コリント人への～』2:7)

復活の子

復活の子は以下の力を持つ。

1. すべての内的世界を見聞きする力。
2. 生と死の神秘を操作する力。
3. 生ける死者たち(人類全体)を裁く力が与えられている。
4. 意のままに生まれ、意のままに肉体を離れる。
5. 意のままに嵐を鎮め、それを起こす力。
6. 意のままに大地を揺るがし、大陸を沈める力。
7. 火とハリケーンなどを支配する力。

日の老いたる者、世界の主であるサナット・クマラ(Sanat Kumara)は、偉大なる宇宙の白友愛結社の「イニシエイト団」の創始者であった。この偉大な存在は、聖書の語る四つの御座のうちの一つであり、レムリア時代に地球に運んできたのと同じ肉体をまとして、悠久の太古からアジアに住んでいる。死は彼に指一本触れることはなかった。そしてこれからも決して触れることはないであろう。なぜなら彼は復活の子であり、死は誰一人として復活の子に手を出すことはできないからである。

火星の光線に属するマスター・モーリヤ(Moria)は、ヒマラヤの道端に住んでいる。粗末な家に居住し、おびたしい数の弟子を持ち、現在の体は九百歳を越えている。マスター・モーリヤに対しても、死は指一本触れることはなかった。そしてこれからも触れることはないであろう。なぜならマスター・モーリヤは死者たちの復活の子であり、死は誰一人として復活の子に指一本触れることはないからである。

死が手出しできるのは弱者、臆病者、生ける死者や汚れた姦淫を止める勇気を持たなかった、持てなかった大淫婦の子のみである。

マスター・クートフーミ(Kout-Humi)もまた西洋ではよく知られていて、叡智の光線に属している。彼も、判別できないほど高齢であり、ヒマラヤ山脈の万年雪をいただいた山頂に神殿を持っている。復活の子であり、死

は彼に対しても手を出すことはできない。なぜなら死は愚か者、姦淫者、姦通者にのみ手を出すからである。

マスターD. K. (ジュアルカル Djwal Khul)、彼もまた復活の子であり、性エネルギーの利用法を知ったもう一人の超人である。このマスターは水星の光線に属し、マスター・H. P. ブラヴァツキー (Blavatsky) を助けて、『シークレット・ドクトリン』の大部分を書き取らせた。現在1675年当時と同じ肉体をまもっていて、死は彼に指一本触れることはなかった。なぜなら彼は復活の子だからである。

さて次にタルソのパウロである。このマスターは現在肉体をまもっているが、彼がマスター・ヒラリオン (Hilarion)、『道の光』という書物の著者である。マスター・ヒラリオンは科学の光線で進化した。水星の光線のマスターである。

金星の光線のマスター・セラピス (Serapis) もまた復活の子であり、数え切れないほどの高齢である。彼は世界の芸術を導いている。

マスター・ラコッチ (Rakoczi) はサンジェルマン伯爵、ロジャー・ベーコン、フランシス・ベーコンと同一人物である。このマスターは世界の政治を導いている。現在チベットに住んでいて、17、18、19世紀にヨーロッパのすべての宮廷で知られていたのと同じ肉体をまもっている。死は彼に指一本触れることはなく幾世紀もの歳月が流れた。なぜなら彼は復活の子だからである。このマスターは木星の光線に属している。

* * *

七つの光線

宇宙的進化の七つの光線が存在する。各々のマスターはある特定の光線に属している。

- | | |
|----------|----------|
| 1. 月の光線 | 5. 火星の光線 |
| 2. 水星の光線 | 6. 木星の光線 |
| 3. 金星の光線 | 7. 土星の光線 |
| 4. 太陽の光線 | |

大密儀のそれぞれのイニシエーションにおいてイニシエイトは他の宇宙的光線に入っていく、という神智学者たちの主張は本当ではない。マスターたちはそれぞれ自分自身の光線の中で進化し、向上し、決して光線を変えたりはしない。

内的世界には七つの光線の各々に対応する密儀の寺院がある。

火星の光線のマスターである私、サマエル・アウン・ベオールはこれらのことについて証をする。理論家たちのように書物でそれを読んだからではなく、それを生きてきたからである。私は復活の子であり、死者たちの復活について証をする。なぜなら私、アウン・ベオールは生ける死者たちの間から復活したからであり、新しい水瓶座時代の創始者としての私の務めは、ガリラヤの聖なるラビの神聖な教義について証をすることである。それは世界の救世主のこの神聖な教義を、人種、性、階級、肌の色に関係なく地球全土に広めるためである。

これらの光線の各々には、その長がいる。

1. 月の光線の長：ガブリエル
2. 水星の光線の長：ラファエル
3. 金星の光線の長：ウリエル
4. 太陽の光線の長：ミカエル

5. 火星の光線の長：サマエル
6. 木星の光線の長：サチャリエル
7. 土星の光線の長：オリフィエル

これらは、神智学者たちが大いに語ってきた七つの光線である。彼らは全巻をこのテーマに捧げてきたにもかかわらず、それについての正確で具体的な説明を全くしていない。神智学者たちは光線について余りにも漠然と記述し、それは本当のところ霊の奥深くからの渴望を満足させることはなかった。神智学者たちはより実践的な面が欠けている。実際、神智学協会の教えは誰の役にも立たない。

人間は誰でも自分の額を横切るしわの本数を教えるだけで、どの光線に属しているかを知ることができる。

- 一本だけある人は月の光線に属する。
- 二本ある人は水星の光線に属する。
- 三本ある人は金星の光線に属する。
- 四本ある人は太陽の光線に属する。
- 五本ある人は火星の光線に属する。
- 六本ある人は木星の光線に属する。
- 七本ある人は土星の光線に属する。

(『ゾディアカル・コース』参照)

七つの光線のマスターたちはみな、「復活の子」である。我々は全員カルバリオの辛苦をなめ、自分自身の中で主の昇天を経験した。

マスターは誰一人として自分の属する光線を離れない。各マスターは自分の光線の中でのみ働く。我々の光線の長は、天にましますわれらの父である。マスターは誰一人として天にまします自分の父を見捨てることはない。それゆえ神智学者たちが信じるように、マスターがある光線から他の光線に移っていくことは不可能である。

私、アウン・ベオールはわが父、サマエルの子であり、たとえ過去にお

いて別の惑星の統治下で進化したことがあったとしても、サマエルの光線を離れることは決してなかった。なぜならアウン・ベオールは、サマエルの炎から放たれた一つの火花だからである。したがって私はサマエルから出て、サマエルに戻り、すべての生まれ変わりにおいて額に五本の横じわがあった。

日の老いたる者

主の昇天で我々のアストラル体は奈落から解放され、天にましますわれらの父の光輝くオーラの内部で昇天する。

内なるマスターが大密儀の第三イニシエーションの神聖な祭壇上に両膝をついてイニシエーションを受けるとき、祭壇の上にサナット・クマラがまるで果てしない青空から降りて来たかのように燦然と現れる。彼の名において、すべてのイニシエーションが授けられる。

この日の老いたる者の崇高な臨在は、言葉で言い表すことはできない。その白髪は両肩にたれ、一度たりともはさみを入れたことがないように見える。白ひげと威厳のある顔は、あたかも神のごとき様相である。杖を手にする半裸のサナット・クマラはアダム派の人(アダマイト)のように思われる。

サナット・クマラは何千年にもわたる浄化の結果である。

内なるマスターは意識の高次元の世界で大密儀の第三イニシエーションを受けるが、いかなる種類の物質的乗り物もまともにイニシエーションに出席する。

密儀のスクール

“秘教的な復活”のこの古い教義は、古代のすべてのグノーシス派に、過去のすべての秘教的な共同体に知られていた。ナザレ派、ペラタエ派、ピタゴラス学派など。復活はエジプト、ギリシア、ローマ、バビロニア、シリア、ペルシア、インド、メキシコ、ペルー、トロヤ、カルタゴなどの密儀で育まれた。

復活はエッセネ派の教義であり、古の賢者たち全員の教義であった。これはノスティックたちの叡智である。

イシスは聖なる男根によってオシリスを復活させ、常に生きている。性の叡智は真正の密儀のスクールすべての基礎である。これは古代密儀のリンガム・ヨニである。救いは「性の秘儀」の中にのみある。

「性の秘儀」と完全なる神聖さによって、すべての偉大なる宇宙白友愛結社の大密儀のマスターになることができる。

アストラル体の変化とその影響

昇天の科学的進行に伴ってイニシエイトの体内では生物学的変化が起きるが、その症状として特に、日没時の有機体の衰えが挙げられる。しかしながら、それは本来の意味での病気や有機体の衰弱を意味するのではない。四十日間にわたる主の昇天というアストラル体の変化の結果から生じる、一時的な現象に過ぎない。

論理的に導き出せることであるが、アストラル体のすべての変化は、細胞の触媒過程において、そして内分泌腺の生物電気学的なメカニズムにおいて同種の変化を引き起こす。驚くべき実験室のように内分泌腺はタットワを様々な生化学的成分に変換するが、実に多種多様なそれらの組合せによって、最終的にはホルモンという具体的な形をとる。

アストラル体の基礎は肝臓にある。「HIGADO」（スペイン語で、「肝臓」の意）という言葉調べてみれば、I. A. O. の三文字があるのがわかる。

ディオドロは詩の中で語っている。「あらゆる神々の中で最も崇高な神がI. A. O. であることを知みなさい。アイデスは冬である。ゼウスは春に、ヘリオスは夏に活動を始める。そして秋にはI. A. O. が再び活動を始め、休みなく働く。I. A. O. はジョヴィス・パーテル（父ジュピター）、すなわちジュピターのことである。ユダヤ人たちは不当にジュピターのことをヤーヴェと呼ぶ。I. A. O. が生命の実質成分であるワインを与えてくれる。一方、ジュピターは太陽の僕である」。

（ウィラコッチャ著『ノーシス教会』第四版97頁）

人間の地獄からアストラル体を解放する必要がある。

乙女座と関係するエソテリック・チェンバー（秘教の間）では、実存の木そのものの根は腹部にあるということを学ぶ。腸を深く研究することによって、この主張を裏付けることができる。木の根と我々自身の生命の木の根との不思議な類似点を観察しなさい。これらの根は人間の腸に相当し、乙女座と密接に関係している。

木の根は大地の土からその生命を吸収して、それを栄養のある樹液に変換し、木のすべての維管束と細胞を通して広がる。それと同様に、人間の腸の根（柔突起）も食物から実に様々な活力素をうまく抽出し、それによって我々自身の有機的生物の驚くべき木を養っている。

木の根が大地の暗い奥深いところにあるのと同様に、下腹部と肝臓の奥深くに人間の地獄があり、隠れた敵の原子からなる層、領域、地下世界が形成されている。

主の昇天に先立つ四十日間、創造的なヒエラルキーは我々のアストラル体を人間のその地獄から解放しなければならない。そこで我々は過去の闇のすべての場面を思い出し、そして再現する。その再現は、「クレストス」

の復活後に始まる。

再現の過程は、宇宙の最も暗い闇の地下圏で始まる。その地下圏は血の色をしていて、その恐ろしい奈落には世界の怪物と邪悪の権化がすべてそろっている。それから闇の場面をすべて再現しながら、隠れた敵の原子の様々な層、領域、界層を通して少しずつ上昇していく。

「クレストス」復活後の十九日目、ある被膜、すなわち腹部のアストラル体と対の原子物質が、ヒエラルキーによってもぎ取られる。人体の肌に似ているその被膜は、隠れた敵の原子からできている人間の地獄の門のようなものである。

この閉ざされた門は、人間的霊を悪の奈落に縛り続ける。腹部のアストラル体と対であるこの厚い原子被膜を取り除いた後、マスターたちは腹部のこの部分を薬で治療しなければならない。

アストラル体のこれら諸々の奥深い変化が、内的な有機体の生命現象に影響するのは当然のことである。マスターの肉体に現れるいくつかの症状として、一時的に有機体が衰弱したり、ときおり空腹を感じたりする。

* * *

10の神秘

数字19を1と9に分けると合計10になる。道の帰依者のあらゆる進歩は、次の数字に基づく。 $1 + 2 + 3 + 4 = 10$ 。なぜアストラル体を人間の地獄に縛りつける原子の根が、ちょうど19日目にもぎ取られなければならないのか、その理由を今、私の弟子たちは理解するだろう。

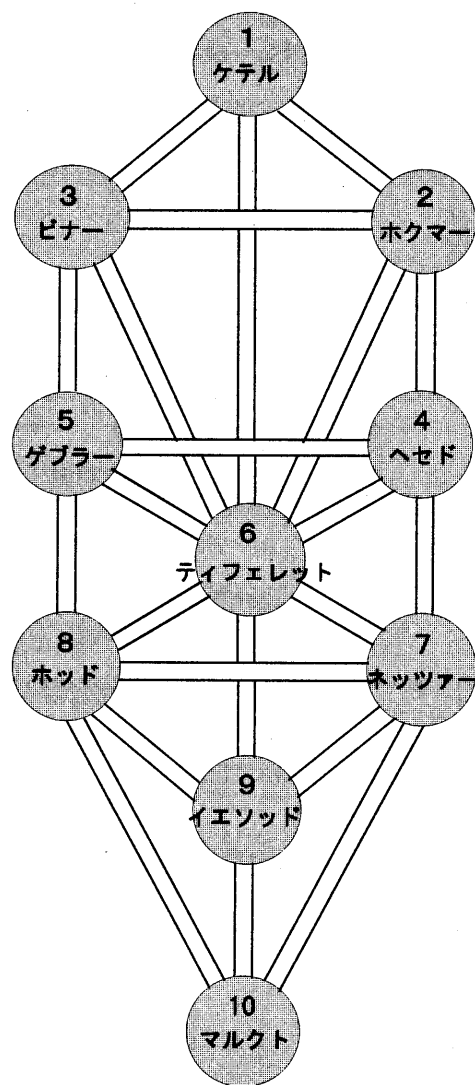
ここで説明しなければならないことがある。それは我々が述べているその幽閉状態とは、単にアストラル体の生命のエッセンスのことであり、奈落の底に閉じ込められた驚くべきアストラルの乗り物の根それ自体を指しているということである。その根は有機体の木の根それ自体の、地獄に沈んだエッセンスである。それは人間の地獄であり、そこからアストラル体を解放しなければならない。

このように学徒のすべての進歩は数字10に基づいている。カバラの十のセフィロトは数字10を基礎とする。これら十のセフィロトは以下のとおりである。

1. ケテル：日の老いたる者。タロットの第一のアルカナ「魔術師」。そのアルカナの本来の神聖文字は、一人の人間で表される。
2. ホクマー：智慧。愛。タロットの第二のカード「女教皇」「女神官」。月。本来の神聖文字は人の口である。
3. ビナー：知性。力。タロットの第三のカード「皇妃」。金星。本来のシンボルは、物をつかむ手である。

これら三つのセフィロトは、セフィロトの王冠である。次に七つの下位のセフィロトが以下の順で続く。

4. ヘセド：慈悲。タロットの第四のカード「皇帝」。木星。神聖な存在。アートマン。本来の神聖文字は胸。
5. ゲブラー：厳格。タロットの第五のカード「教皇」「秘儀司祭」。人のブッディ体。戦士の火星。



生命の樹

6. **ティフェレット**：美。聖霊の愛。金星。人間のコーザル体。タロットの第六のカード「恋人」。
7. **ネットザー**：勝利。万物の永遠。メンタル界。水星。タロットの第七のカード「戦車」。
8. **ホッド**：光輝。アストラル界。土星。タロットの第八のカード「正義」。
9. **イエソッド**：基礎。絶対。エーテル界。性。太陽。タロットの第九のカード「隠者」。
10. **マルクト**：王国。宇宙全体。マリアまたは乙女、自然。タロットの第十のカード「運命の車輪」。

これら十のセフィロトは意識の中で生き、進化し、そして進歩する。人間はまさにセフィロトの木である。人間の両手には十本の指があり、モーゼの十戒が十の戒律からなるのは、きわめて興味深いことである。今や道の帰依者は数字10の重要性を理解するだろう。今や私の弟子たちは、どうしてクレストス復活後の19日目に原子の根がマスターたちによって人間の地獄から引きちぎられるのか、そのわけが理解できただろう。

パウロの復活

タルソのパウロがピリピ人たちに手紙を書いた頃、まだ復活を達成していなかった。私の主張を証明する以下の節を見てみよう。

「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。

わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づく神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。

すなわちキリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまと等しくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したい

のである」。(大密儀の第三イニシエーション)

「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕らえようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕らえられているからである。

兄弟たちよ。わたしはすでに捕らえたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目指して走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」。

(『ピリピンへの手紙』3:7-14)

今日、パウロはすでに復活を達成しており、現在再び肉体をもってマスター・ヒラリオンとして、『道の光』という書物を執筆している。

ノーシスの原始キリスト教の叡智

これはノスティック・カトリック教会の最初の教父たちの古の教義である。以下の人々はこの教義に属した。バシレイデス、アンテオケのサトゥルニヌス、魔術師シモン、スペインに多数の修道院を設立したカルボクラテス、ポントのマルキオン、聖トマス、ヴァレンティヌス、聖アウグスティヌス、テルトゥリアヌス、聖アンブロシウス、イレネウス、ヒッポリトゥス、エピファニウス、アレクサンドリアのクレメンス、マルコ、ケルドン、エンペドクレス、聖ヒエロニムスなど。これはナザレ派、セティアン派、ペラタエ派、ヴァレンティヌス派、ユスティヌス派などの古の教義である。これは古代のあらゆる密儀のスクールで知られていた、キリストが七十人の弟子たちに密かに教えた古の教義である。それは私サマエル・アウン・ベオールが水瓶座時代を始めるために公然と普及している秘密の科学であり、神聖な救世主の秘密の教義である。

このすべてのノーシスの叡智は、『ピスティス・ソフィア』(信仰の智恵)の中に含まれている。この書物は四つの部分からなっている。第一部および第四部には何の記載もないが、この第二の書の最初には「ピスティス・ソフィアの第二の書」というタイトルが付いていて、第二部の最後に

「救世主の書物の要約」という記載がある。

以下の説明は、クルム・ヘラー、つまりマスター・ウィラコッチャの著作である『ノーシス教会』第四版の12頁からの抜粋である。「この書物はノーシスの教義全体の最高峰と見なされ、大英博物館蔵のアスキュー写本に基づいてシュヴァルツェとペテルマンによってラテン語で1851年に出版された。写本の成立年代は3世紀にさかのぼり、中には5世紀のものであると考える人々もいる。『ヴァレンティヌスに帰せられるグノーシス派文書』はコプト語の手書き写本からM.G. シュヴァルツェによってコピーされ、ラテン語に訳された」。

それゆえ復活の秘教的な教義は、我々がここで教えているように『ピスティス・ソフィア』の1章から148章までの中に、そして聖書の奥深い秘教的叡智の中に隠されている。

残念なことにマスター・ブラヴァツキーは、ノーシスの宝に気づけなかった。ノーシス神聖教会の教義は、主イエス・キリストの叡智である。

公 現

さて、続いて救世主の公現に進もう。この古代の言葉はギリシア語から来ていて、公現とはクレストス復活後の我々の内部におけるキリストの昇天、天啓、または顕現のことである。悪の奈落の底で我々の過去をすべて再現した後、この昇天は聖霊の光明・正覚に導いてくれる。

公現と共に光明・悟りを授かるが、昇天前の四十日間、深い闇に沈む。

多くの兄弟たちにとって復活の極致に至ることは、あまりにも遠く、そして困難であるかのように思える。だが姦淫をやめる者はみな、この言語に絶する頂点に速やかに達することができるだろう。

聖書は次のように語っている。

「すべての人は、結婚を重んずるべきである。また寢床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる」。

（『ヘブル人への手紙』13:4）

神の言葉である聖書はこの節で、人間の救いは性の秘儀の中にのみあると論している。なぜなら不品行と姦淫を遠ざけた汚れのない寢床は、みだらな交わりをしないで、巫女である妻と性の秘儀を行うことによってのみ可能だからである。

「また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい」。（『ヘブル人への手紙』12:16）

そのように聖性の道に従うことによって、公現の準備をし、クリストの存在を我々の中で実現するのである。

* * *

アロッチからの贈りもの

イニシエイトは日々、神に祈らなければならない。すべての祈りは、一杯のワインと一切れのパンを用意して行うべきである。聖なる救世主は言われた。「わたしを記念するため、このように行いなさい」。

（『ルカ福音書』22:19）

ローマの主任司祭たちは聖塗油式を独占したが、そのために人類は哀れにも塗油式のないまま二十の世紀をふいにした。わが兄弟たちよ、いつも祈りなさい。それからパンをちぎり、ワインを飲みなさい。この荘厳な教えは、指揮の天使「アロッチ(Aroch)」のおかげである。

各人は一人きりで祈り、たゆまずパンとワインの分配にあずかることができる。最も力のある祈りは「主の祈り」である。

清潔で、いい香りのするテーブルクロスの上にパンとワインを常に置く。祈りの後に、初めてパンとワインを口にすることができる。すべての神秘的力を目覚めさせる数兆個ものクリスティックな原子が、パンとワインと共に我々の体内に取り入れられるのである。

コスミック・クリストとしての資格を持つキリストは語った。「わたしは命のパンである、生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる」。（『ヨハネ福音書』6:48、51、56）

さて、この教えによって、性の秘儀と聖体塗油式によって、すべての人間は自分自身をクリスト化することができるだろう。兄弟全員は、常にパンとワインをそばに置いて、日々たゆまず聖塗油式を行うとよい。

祈りは、いつもひざまづいて行う。祈り方を知る必要がある。祈りとは神との語らいである。指揮の天使アロッチがノーシス塗油式という、このすばらしい鍵を私に教えてくれたとき、祈り方も一緒に教えてくれた。

子供の姿をした天使アロッチが、ひざまづいて両手を胸の前で合わせ、至純なる目を天に向けていたが、そのひとときは言葉で言い表わせないほど神聖なものであった。アロッチの顔が燃えているかのように見えたその一瞬、彼は深い愛に満たされて叫んだ。「主よ、主よ、わたしを転落させないで下さい。わたしを決して光から遠ざけないで下さい」。それから我々にパンをちぎり、食べるよう配ってくれた。そして小さな銀のジョッキにワインを入れて、数個の杯にそれを注ぎ、我々に飲むよう配ってくれた。

アロッチのような天使たちはもはや古い月のアストラルは使わず、高位のアストラル、我々のベニヤミンのみを使う。そのために、言葉では言い表せないほど美しい子供のようなのである。彼らは復活の子であり、命の子である。その汚れない額からは、ただおそるべき閃光が放たれている。

これらの天使たちの援助によって、生身の体ごと、「ヒーナス」の状態で、地球の最も遠く離れたところまで移動することができる。覚醒から眠りへの移行状態のときに、天使を呼んで、望むところに肉体ごと運んでくれるよう願うことができる。もし天使が我々の願いが正しいと判断したら、望んだ場所に運んでくれるだろう。信じて寝床から起き上がるだけでよい。ただし眠ったままである。（『使徒行伝』第12章を参照）

マスターのベニヤミンは貴重な入手品である。マスターはある特定の人物や遠隔の地のことを考えるだけで十分である。瞬時にしてそこに移動し、起きることすべてを見聞きする。

寺院とクリスティック光線

マスターは昇天の日が近づくにつれて、聖霊の光が輝く意識の高次元世界で、閉ざされた寺院を知覚しはじめる。寺院の門は四十日目に関き、そのときマスターは純粋な魂の言語に絶する世界の真正の住人として、認められ、受け入れられる。そこには言葉では表せない父の愛が輝いている。

マスターはその崇高な寺院を忘我の状態で見つめる。その三角の丸屋根

には、神々しい風貌をした老顔の、聖霊の白ハトがとまっている。

内なるマスターの中に、われらが愛すべきベニヤミンは完全に吸収されたが、そこに我々の神聖な意識が激しく揺れている。

ところで神聖な意識と古いアストラルとの間には、幸運にもコスミック・クリストのおそるべき光線、すなわち第三段階の火の力が存在する。そのことを我々は知るべきである。それは古いアストラルと神聖な意識とを結んでいる。

このクリスティック光線はアストラルと内なるマスターとの架け橋であり、その中に我々のベニヤミンの言語に絶する命がうち震えている。

クリスティック光線、すなわちアストラル体のクンダリーニーはそれゆえ世界の神聖な救世主の聖なる御手のようであり、それは我々を奈落から連れ出し、闇から永久に引き離してくれる。その御手はまた、マスターの救いの手のようであり、言語に絶する父の寺院まで我々を引き上げてくれる。

キリストは夜、盗賊のように思いがけないときにやって来る（『マタイ福音書』24:44、『ルカ福音書』12:40）。アストラル体のクンダリーニー、すなわちクリスティック光線が目覚めるとき、おそろしい電光のように輝く。最初、アストラル体のクンダリーニー（イエス・キリストの光線）は、美しく輝く白色をしているが、完全に発達すると、言語に絶する光輝を放射する崇高な金色になる。

キリストはゴルゴタの劇的な出来事において、血で荘厳な契約に署名したが、その契約で誓った自分の言葉を成就するのは第三段階の火の力によってである。

第三段階の火の力が頭頂から首尾よく出るとき、長老の頭をした白ハトという神秘的な形をとる。それは聖霊のハトであり、言葉では言い表せない“あの寺院”の三角の丸屋根の上にじっと留まって、マスターの日々が過ぎ去り、父の“あの寺院”の門が開く崇高な瞬間を待っている。

父の光が輝く荘厳な“あの寺院”の門には、我々のアストラルの二つのイメージが見られ、開門の厳かな時を待っている。

三人の乙女たち

奈落での闇の再現の三十三日目に、三つの低次の乗り物、正確に言えば三つの低次の乗り物の心理的な意識が、火で試される。奈落での闇の再現の結果を知るために、これら三つの低次の乗り物を検査する必要がある。

そのとき一人の大祭司が床（地面）に三個のパンを投げる。するとパンは爆発したように炸裂し、燃えさかる火となる……。そのとき、燃えている三つの炎の中心に、美しい三人の乙女たちが火の試練に耐え忍んでいる姿が見える。この三人の乙女たちとは心理的な意識のことであり、肉体、生命体、アストラル体のエテリックな原理である。

もしこれらの美しい乙女たちの誰かが火の試練の中で死ぬようなことがあれば、さらに正確に言えば燃え盛る炎の中で逃げたり、恐怖のあまり身震いしたり、失神して倒れたりすれば、我々の石はまだあまり鍛錬されていないことがこの試練で明らかになる。この場合、苦しみという硬い金剛砂で石の各面を磨くまで、マスターは日取りを延期されるだろう。すでに霊のダイヤモンドがよく磨かれ、その持てるすべての光輝が輝くとき、それは昇天の準備が完全に整ったということである。

これら三人の乙女たちは、我々の三つの低次の乗り物のことである。昇天を達成するためには、三つの低次の体の各々から純粋で美しい心理的エキスを抽出しなければならない。これら三つの罪の体は、神のための、そして父のための聖三位一体の霊を我々に与えなければならない。

これが、バフォメットの神秘である。

我々の肉体、生命体、アストラル体は驚くべきものである。

「矢の満ちた矢筒を持つ人は幸いである。彼は門で敵と物言うとき恥じることはない」。
(『詩篇』127:5)

この試練で四個目のパンは燃えないのが見てとれる。それはメンタル体と大密儀の第四イニシエーションを象徴するからである。マスターは昇天後、第四イニシエーションに進むことができる。

闇から生じる光

マスターが三十三日間のこの試練に勝利を収めるとき、一個の古びた傷を持つランプが示されるが、それは我々の昔の地下世界を象徴するものである。そして「それはもう役に立たない」と言われる。

過去はその実をすでに結び、闇のルシファーの偽りの光と理性の偽りの光はもはや何の役にも立たない。今や我々は一つの新しい光を、純粋な魂の光を、クリストの光を、父の言語に絶する光を必要とする。三十三日が過ぎ、肉体、生命体、アストラル体という三位一体の霊の試練の後、マスターは奈落の闇の力を支配するおそるべき力を手にする。

この聖四旬節の間、情欲の誘惑を克服するとき、イニシエイトは悪魔からすべての力を盗み、全能で力あふれる存在となる。

彼の声の金属的な音に、一つの変化が生じる。

もはや情欲の誘惑は、燃えるような挑発的状态を彼の中にもたらすことはない。彼は悪魔から火を盗んでしまい、悪魔はもはやメンデスを一匹も持っていない。これがバフォメットの畏怖すべき秘密である。つまり光は闇から生じ、快い芳香を放つバラは、土の泥の中からその驚嘆すべき香りを抽出する。バフォメットの神秘とは驚くべき錬金術の神秘である。メンデスの山羊は、イニシエーションの角張った石である。

この三十三日の後、魅惑する誘惑の荒波が、その肉欲で戦士の鋼鉄の盾

を叩くが無駄に終わる。マスターは今や鋼鉄のようになり、情欲はもはや
タンタロスの責め苦、交わりを求めるおそろしい渴望を彼の中に引き起こ
 すことはない。

マスターは今や力の指揮者であり、おそろしい戦士である。なぜなら彼
 は悪魔から力を奪い取り、怖じ気づいた闇はおそれをなして逃げるからで
 ある。かつて紅海の荒波はマスターに止めどなく挑発をしかけ、マスター
 はそれに対して意志の剣を握りしめ、そのおそろべき情欲に耐えた。今で
 は紅海の荒波がマスターをおそれ、闇は怖じ気づいて叫び声を上げながら
 逃げていく。闇にとって、昔のマスターはなまめかしい乙女のようなであ
 ったが、今や闇の方が震え上がり、マスターは自分たちの力を盗み、武器を
 奪ったおそろしい怪物のように見える。

これがメンデスの雄ヤギの神秘である。これがバフォメットのおそろべ
 き秘密である。マスターたちの玉座の脚は怪物からなっていて、寺院の神
 聖な品々は、動物の形をした台座の上に支えられている。

主の昇天の三日前、イニシエイトは言葉では言い表せないほど美しい領
 域に入り始める。なぜなら自然は飛躍しないからである。一日はつねに夜
 明けから始まり、最初、人間は必ず子供であり、それから若者となる。

黄道十二宮

ちょうど三十七日目にイニシエイトはアストラル体で黄道十二宮を調べ
 直すが、その中で彼は子宮内の胎児と同じように成長し、進化する。黄道
 帯は我々の太陽系の子宮であり、我々の霊の宇宙的な子宮である。

黄道十二宮は、それぞれ自分の色を持っている。

獅子座の光は美しい山吹色をしている。イニシエイトは獅子座にたどり
 着くまで逆の順序で黄道十二宮を一つひとつ調べ直す。この星座は「イン
 テイモ」の寺院である心臓を統治している。獅子座に辿り着くまでどうし

て黄道帯をまる一周するのか、その理由が今、理解できたであろう。

我々は炎の主たちの子であり、彼らの住まいは獅子座である。我々の進
 化は獅子座から始まり、獅子座で終わる。精神的には各人の魂は天にまし
 ます自らの父を持つが、炎の主たちは精神的な体と肉体を我々に与えた。
 この見地から見ると、我々は炎の主たちの子である。

光は精液の実質である。そして黄道十二宮の精液は、この黄道帯の子宮
 内で我々を育んだ。

光は常に光る言葉を伴う。話し言葉の基層は、太陽の言葉である。すで
 に知っているように、ロゴスは鳴り響く。イニシエイトが見聞きできる母
 音は24ある。これら24の母音は黄道十二宮に対応している。

黄道帯の24のメロディーは、宇宙の昼の壮大な幸福感と共に全創造に
 鳴りわたる。それは宇宙の歩みをしっかりと支える神の言葉である。

(クルム・ヘラー著『ロゴス、マントラ、マジック』参照)

マスターの昇天

聖四旬節が終わると、主の昇天のときが到来する。そのときイニシエ
 イトは魂の王国の言語に絶する“あの寺院”において、盛大な祭典と美しい
 音楽で迎え入れられる。

昇天の夜はとても興味深い。イニシエイトの大袋は無数の黒魔術師たち
 によって襲われ、彼らはさらにもう一つの霊が言語に絶する光の世界に逃
 れて行くのを見て腹を立て、怒り狂ってマスターを捕らえようとする。

マスターは寺院で聖霊のハトを求めるべきである。

「そこでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられる
 であろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば

開けてもらえるであろう」。

「すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者は開けてもらえるからである」。

「あなたがたのうちで、父であるものは、その子がパンを求めるのに、小石を与えるだろうか。魚を求めるのに、魚の代わりにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか」。

「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」。

(『ルカ福音書』11:9-13)

マスターの昇天は寺院の四位^み(四人)の天使たちによって告げられるが、彼らの各々は地の四方に向かってラッパを吹き、そのとき、子すなわち我々のアストラルが上に、つまりに天に上げられる。こうして聖書が成就する。一言一句違えず聖書は次のように言う。

「ただ、聖霊があなたがたにくだるとき、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」。

「こう言い終わると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」。(『使徒行伝』1: 8、9)

この瞬間からマスターは天に、意識の高次元の世界に迎えられ、カルバリオの七つの言語がマスターを全能にする。

「人の子が栄光の中にすべての御使いたちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう」。(『マタイ福音書』25: 31)

人の子とは我々の霊のことであり、今、栄光の座に着く。

「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座に着かせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」。

(『ヨハネの黙示録』3:21)

「インティモ」の座は父の御座であり、勝利を得る者は「インティモ」と共に彼の座に着く。このようにして、キリストがカルバリオの丘で誓った言葉は成就される。

あがない

そのために、キリストはやって来たのである。人類を救うために、キリストはやって来たのである。そして、まさにこの方法で人類を救うのである。ノーシス典礼書はこのように語る。

「そしてノーシスの偉大なる聖司祭であるイエスは、大いなる人を讃えて快い詩歌を歌い、使徒たちに言われた。『我がもとに來たれ』。そして彼らは、それに従った。すると彼は四方に向かって静かな視線を送られ、深く神聖な名レウ(Lew)を発音し、彼らを祝福し、彼らの目に息を吹きかけられた」。

「そして彼らに叫ばれた。『上を見よ。あなたがたはもう超視覚者だ』」。
「すると彼らは目を上げ、イエスの指さす方を見た。そこに誰一人として描写することのできない偉大な十字を見た」。

「偉大なる司祭は言われた。『その大いなる光から目を離し、反対の側を見よ』。そして彼らはそこに偉大なる火、水、ワイン、血を見た」。

「そして偉大なる司祭は続けられた。『真実あなたがたに言う。私が世界に他でもない、罪のあがないの火、水、ワイン、血を持ち來た。あの『光』がある、その光の場所から火と水を持ち來た。そしてバルベロス(Barbelos)の住まいからワインと血を持ち來た。ある一定の時が過ぎた後、父は私に聖霊を白ハトの形で送られた。しかし聞きなさい。火、水、ワインは罪のあがないと浄化のためである。血は人間の体の象徴として私に与えられ、それをバルベロスの住まい、宇宙の神の偉大な力のあるところで受け取った』」。

「『私の内に聖霊が降りたように、あなたがた全員に聖霊が降りて、光の至高の場に連れて行ってくれる。だからあなたがたに言ったのである。火をこの地球に私は持って来たと。すなわちそれは、火をとおして世界の罪をあがなうために降りてくるのと同じである』」。

「だからこそ救世主は繰り返し言われた。『もし、あなたがたが神の偉大なる賜物を知り、認識するのであれば、あなたがたに“何か飲みものを下さい”と言っているのが誰であるのかを識るのであれば、甘美なアンブロシア（神膏）である永遠の泉からの飲みものを、私に乞い願うことだろう。そして、あなたがた自身、同じ命の泉となるであろうに』」。

「次に聖杯を手に取りられ、祝福を与えられ、全員にそれを差し出されながら、言われた」。

「『これは、あなたがたの罪をあがなうために、あなたがたの代わりに流された契約の血である。だからこそ私の傷から血と水が吹き出るように私の横腹に槍が刺されたのだ』」。

「そして偉大なる司祭イエスは彼の者たちに言われた。『火とぶどうづるを、私のもとに持って来なさい』。彼らはそれに従った。そこでイエスは供物を祭壇に置かれ、その横にワインの鉢を置かれた。そしてワインの前に水の入った鉢をひとつ置かれた」。

「そして彼の声聞いた者たちによれば、彼はパンを置かれた。偉大なる司祭イエスは白い装束を身に着け、そのように使徒たちもまねた」。

「次にパンを聖別して全員に与えながら言われた。『これは我が体なり。あなたの罪のあがないのために受けなさい』。そしてワインを全員に与えながら言われた。『これは我が血なり。世界の罪をあがなうために流された、この血を受けなさい』」。（『ノーシス 証言の儀式』より）

これは水瓶座のメッセージである。すなわち、これは新時代のメッセージである。

「また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」。

「これらのことをあかしするかたが仰せになる、『しかり、わたしはすぐ来る』。アアメン、主イエスよ、来たりませ」。

「主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように」。

（『ヨハネの黙示録』22: 19-21）

* * *

コスミックドラマ

【ロンギヌス】 十字架上のイエスを槍で突き刺したローマ兵。もとはガイウス・カシウスといった。当時のローマの風習では、打ち倒した敵のわき腹に槍を刺して相手の死を確かめた。

【七つの言葉（十字架上の）】 十字架上のイエスの発した言葉。①「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」（ルカ 23:34）②「よく言うておくれ、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」（ルカ23:43）③「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」「これはあなたの母です」（ヨハネ 19:26、27）④「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ 15:34）⑤「わたしは、かわく」（ヨハネ19:28）⑥「すべてが終わった」（ヨハネ19:30）⑦「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」（ルカ 23:46）

【タットワ】 エーテルのヴァイブレーションのこと。アカーシャ（空）、ヴァーユ（風）、テジャス（火）、プリトヴィー（地）、アパス（水）および秘密のタットワであるアーディとサマディがある。（『ノーシス入門』第3章参照）

【ザフナテ・パネア】 ZAPHNATH PAANEAH。日本聖書協会の改訳から引用（創世記41:45）。日本聖書刊行会の新改訳では「ツァフェナテ・パネアハ」となっている。ヨセフがエジプトでパロ（ファラオ）から与えられた名。エジプト語で「神が語られる、そして彼（神）は生きる」の意であると言われる。

ベニヤミンの銀杯

【ナザレ派】 Nasarenos。ナザレ人とは「ナザレ生まれの人」のことで、一般的にはイエスを指す。ナザレ派は早くからキリスト教に改宗したユダヤ人キリスト者の一派で、モーゼ五書に規定された祭式を遵守した。

ルター聖書

【キリストは地獄に降りて行き】 新約聖書外典の『ニコデモ福音書』（別名『ピラト行伝』）15-16章に、「キリストの地獄への下降」が描かれている。

【ルター聖書】 マルチン・ルターが、1522～34年の間に訳したドイツ語聖書は今日でも用いられている。折しも活版印刷術の発明という好機に恵まれ、1522年の出版以後40年を経ないうちに10万冊を売った。その翻訳は一般民衆が容易に読みうる言葉であり、聖書を教会から民衆に解放する契機となった。ドイツ文学やドイツ語の統一にも大きな影響を与えた。

【ルター】 1483～1546年。ドイツの宗教改革者でドイツにおけるプロテスタンティズム（新教）の創始者。彼の改革精神の根本は「人は信仰によつての

み義とされる」である。主著『キリスト者の自由』（1520）。

【聖ヒエロニムス】 347～419年。古代教会のラテン教父の一人。聖人。ラテン語訳聖書『ウルガタ』の作成で知られる。

奈落への下降と昇天

【ヒエラルキー】 原義は「ピラミッド型の位階制」。天使、大天使、権天使、能天使、力天使、主天使、座天使、智天使、熾天使の天使団（天軍九隊）。また神々、半神、聖王、タイタン（巨神）、デバにもヒエラルキーが存在する。

【四旬節】 レント、受難節。毎年、復活祭の準備のために行われる断食（節食）と改悛の期間。灰の水曜日から復活祭前日までの日曜日を除く40日間。

【新カトリック派】 英国教会系教会内でローマ・カトリック教会の教義、典礼などを支持する一派。またはフランスでローマ・カトリック教会を去った近代主義的カトリック教徒。

【無余涅槃】 肉体が滅して心身の束縛を離れた完全な涅槃。有余涅槃に対する語。

復活の子

【マスター・モーリヤ】 この名は、インドのモーリヤ（マウリヤ）朝の創始者チャンドラグプタ（在位：前 317～293年）として肉体を持ったときの名モーリヤ由来する。力の光線に属する復活したマスター。

日の老いたる者

【アダム派の人（アダマイト）】 グノーシス派の一派で、アダムとイヴにならって裸の生活を実践し、樂園における最初の無垢な人間に帰ることを目指した。

密儀のスクール

【グノーシス派】 紀元1～2世紀にかけてローマをはじめギリシア文化の及んだ中近東一帯に流行した宗教思想。人間と世界、世界と神の二元的断絶を認めつつ、絶対的始源としての神からより下級の神を分出させてこれを世界の創造者とし、一方人間の救済を神の自己救済として宇宙論的体系をつくる。グノーシスとは、この世界にとらわれた人間を解き放って神の国に戻す自己救済のことである。そこでキリストは地上に下ってグノーシスをもたらすとされた。

【エッセネ派】 イエスの所属した古代のノーシス・スクールで、死海のほとりにそのノーシス僧院があった。エッセネ派の神秘家たちは決して頭髪やひ

げを切らなかった。紀元頃には約四千人の信者がいた。主に農民で手工業も行ったが、商業、蓄財を否定し、常に白衣をまとうて簡素な生活をしていた。律法と安息日を厳守し、会の首長に絶対服従し、大いに予言を行った。靈魂は不滅で死後肉体から解放されて天国か地獄へ行くとし、独身、菜食、聖書を尊重。太陽に祈り、誓いをこぼむ。1947年に発見された死海写本は、エッセネ派クムラン宗団のもの。

【聖なる男根】 エジプト神話によれば、王オシリスは弟セトによって殺され、十四個に死体を分断され、国中にばらまかれた。妻イシスはそれらを見つけ出したが、男根の部分だけはどうしても見つからなかったので木でつくり、遺体をつなぎ合わせた。オシリスは復活し、イシスに子供を授け、昇天した。

ノーシスの原始キリスト教の叡智

【教父】 キリスト教古代の優れた著述家を教会著述家といい、そのうち教理の正統性、生活の聖性が教会から承認されたものを特に教父という。代表的な教父として、オリゲネス、アタナシウス、アンブロシウス、ヒエロニムスらがいるが、中でもアウグスティヌスは最大の教父として有名。

【バシレイデス】 2世紀のアレクサンドリアの人で、シモン派の教説を最初に集大成したグノーシス派宗教哲学者。新約聖書外典『バシレイデスの福音書』は3世紀頃エジプトで成立したと思われる。彼によれば世界は至高存在から直接つくられたのではなく、一つの意志の漸次的発展であり、その出発は三つの存在様式をはらむ世界種子panspermiaである。この運命発展の最後に救済をもたらす天啓の光が来るという。

【アンテオケのサトゥルニウス】 アンテオケ生まれの2世紀前半のグノーシス派哲学者。不可知なる神theos agnostosと、その諸天使および神の国に対し、質料の支配するサタンの国がある。世界や人間は世界を受け持つ七天使によってつくられ、ユダヤ教の神はこのような下位天使の一人に過ぎない。キリストはユダヤ神の力を止揚するために来たアイオーン、理性であり、その肉体は仮の姿に過ぎない。質料からの浄化の道はグノーシスと修徳によってなされ、結婚と生殖はサタンに属すると教えた。

【魔術師シモン】 サマリア生まれ。ピリポから洗礼を受け改宗。聖霊を授ける権威を金で買おうとしてペテロに叱責された。新約聖書外典の『ペテロ行伝』によれば、彼は自ら飛行を試みて預言者であることを示そうとしたが、ペテロの祈りによって墜落死したという。

【カルポクラテス】 2世紀頃のアレクサンドリアのグノーシス派学者。160年頃ローマへ来て教えた。プラトンの影響を受け、この派の信仰至上主義を発展させた。人間の靈魂は以前イデア界に住んでいたもので、それが純粋であ

れば以前を回想し最高の神に合一しようとする。罪ある靈魂は肉体の死後もなお種々の肉体に輪廻するが、罪をあがなった後、信仰と愛によって救われるとする。

【ポントのマルキオン】 2世紀頃黒海沿岸ポントの反ユダヤ的グノーシス主義者。その教説は、最高の善である愛の神と並んで、悪の本源としての世界創造神がおり、キリストはこの悪神の国を滅すために、仮の肉体で現れたと説く。

【聖アウグスティヌス】 354～430年。古代キリスト教最大の神学者。ヒッポの司教。アフリカのヌミディア生まれ。新プラトン派の哲学とキリスト教を統合し、中世思想の基礎を作った。主著「告白」「神国論」「三位一体論」。祝日8月28日。

【テルトゥリアヌス】 160?～222?年。カルタゴ生まれのキリスト教神学者。最初の偉大な教会著述家。ギリシア文化に対抗したラテン神学の創始者。主著「護教論」

【聖アンブロシウス】 339?～397年。ドイツ生まれのミラノの司教。偉大な学者。アウグスティヌスをキリスト教に導いたという。祝日12月7日。

【ヒッポリトゥス】 170?～235年。聖人。殉教者。ローマの教会著述家。聖イレネウスの弟子で、博学な神学者。祝日8月13日。

【エピファニウス】 439～496年。聖人。イタリア・パビニアの司教。祝日1月21日。

【アレクサンドリアのクレメンス】 150?～215?年。アテネ生まれ。キリスト教史上最初の体系的な神学者。教会著述家。キリスト教とギリシア哲学を結ぶ。オリゲネスの師。

【マルコ】 聖人。ペテロの弟子であり、バルナバやパウロの伝道を助け、パウロのローマ入獄にも同行した。『マルコによる福音書』の著者とされるが、確実ではない。

【ユスティヌス】 100?～165?年。シリア生まれの聖人。初期キリスト教の護教者。神学者。哲学者。殉教者。祝日6月1日。

【ピスティス・ソフィア】 PISTIS SOPHIA。新約聖書外典の福音書の一つ。復活のイエスがオリブ山で弟子たちに授けたグノーシスの奥義。

【コプト語】 ギリシア語の影響を受けて変化したエジプト語で、ギリシア文字を使い、教会関係の文書に用いられる（『ピスティス・ソフィア』もコプト語で書かれた）。口語としては13世紀までに衰えた。古代エジプト人の子孫で、特にコプト教会に属するエジプト人が使った。

公 現

【救世主の公現(エフィニア)】 降臨した救世主の栄光が公に現れること。①キリストは三博士において異邦人の前に公に自分を現し、②ヨルダン川の洗礼において自分の神性を公にし、③カナの婚礼の最初の奇跡において神の権能を示してユダヤ人の前に公に自分を現した。祝日1月6日。

アロッチからの贈り物

【主任司祭 (CURA)】 教区長の管理下にある聖堂区の所属信者の靈魂をあずかる司祭。

闇から生じる光

【タンタロスの責め苦】 欲しいものが目前にありながら得られない苦しみ。ギリシア神話に登場するタンタロスは、神々の秘密を漏らした罪で奈落に落とされ、池の水を飲もうとすれば水は退き、頭上の木の実を採ろうとすれば枝は退いて、永遠の飢えと渇きに苦しんだ。

黄道帯十二宮

【基層】 Substratum。基層言語。ある地域で現在は消滅してしまっているが、昔は存在し現行の言語にその痕跡を残していると考えられる言語。

* * *